２００５年８月２１日　大阪豊中国際交流センターにて、
在日インドネシアムスリム協会関西支部主催

諸世界への慈悲としてのイスラーム（イスラーム、ラフマタン　リルアーラミーン）（１）

私がムスリムになって１４年になります。私の夫は学生時代に入信しているので、すでに人生の半分以上をムスリムとして生きてきたことになりますが、私は、ムスリムとして生きた年数がムスリムでなかった年数を超えるにはこれからまだ１５年ほど生きないとなりません。

ムスリムになる以前は、会場のみなさんと同じように普通の無宗教の日本人でした。会場においでの皆さんは、イスラームに関心をお持ちだからこそこうして今日の集まりにいらっしゃっているのでしょうから、当時の私はその皆さんよりももっとイスラームから遠いところにいたと言っていいでしょう。イスラームはアラブ人の民族宗教で、アッラーとはカアバというところに祭られたアラブの部族神だと思っていました。また、ムスリムというと、血の気の多い、争い好きな人たちという印象でした。一つの国の国民が一斉に同じ信仰を持っているなんて、ちょっとロボットみたいで気持ちが悪い、よっぽど頭が単純にできているんだろうなと思うこともありました。

私は確信的な無神論者でした。「確信的な」とはどういうことかと言うと、大半の日本人は無宗教ですが、なんとなく宗教行為は執り行い、神社に初詣に行って１年の安泰を祈り、結婚の時は教会で神さまの前で永遠の愛を誓い、お葬式ではお経を上げてもらいますが、そういうことを一切すまいと決めていたということです。神の存在を信じないのであれば、困ったからといって神頼みするような浅ましいことはしないで、どんなときも、どんなに頼りなくても自分の両足で立とうと決意していたのです。ですが、宗教には関心を持っていたので、キリスト教や仏教などに関する本はいろいろ読んでいました。でも、イスラームについてはついぞ知ろうという気を起こしたことがありませんでした。単細胞なアラブ人の部族宗教だと思っていましたから　―この理解も間違っていますね、今日の集まりの主催はインドネシア人ですが、最大のムスリム人口を抱える国はインドネシアです。つまり、イスラームは発祥の地は確かにアラブですが、人口で言えばアラブの宗教ではなく、むしろアジアの宗教なのです―、普遍宗教として知るに値するものだとは思わなかったからです。

今日おいでの皆さんのほとんども同じようにお考えではないかと思います。つまり、イスラームについては他者の宗教として、他国の文化としては興味があるけれど、自分の生き方に影響を及ぼす価値観を提供するものかもしれない、と考えたことはおそらくないのではないでしょうか。パレスチナ問題、９．１１事件、イラク戦争などといったムスリムが関係する出来事が多発しているせいで、皆さんはそうした事件の背景を知るためにイスラームについてテレビの解説を見たり、本を読んだりしたことがあるかもしれませんが、それはあくまでそうした事件の当事者、つまり、「彼ら」を理解するためのものであって、

普遍宗教として、つまり、「自分自身のため」にイスラームを知りたいと思われたことはないのではないかと思います。

先日、ひさしぶりに書店に立ち寄ったのですが、スピリチュアリズムのコーナーにはいろいろな宗教関係の本がありました。でも、残念ながらイスラームの本はほとんどありませんでした。イスラームに関して最近はかなりの本が出版されていますが、「宗教書」として書かれたものはまずありません。イスラームとはなんぞや、という知的好奇心に応える書はありますが、生きるとはなんぞや、と自問する心の渇きに応える書がないのです。これから人生に漕ぎ出そうとする若者、あるいは、人生の終着が見え始めた年代の方が道を求めて宗教書を読もうとしたとき、そこにイスラームの本はないのです。そのことを私はとても残念なことだと思います。なぜなら、イスラームには、キリスト教よりも、そして、おそらく仏教よりもずっと日本人の持っている宗教的な原風景に近いものがあるではないと思うからです。

うちは朝日新聞を取っているのですが、読者の悩み相談のコーナーに、先日次のようなものがありました。

「生きる意味がわかりません」、「私はこんな自分自身が恐くて、これから生きていく自信がありません。」

１９歳の女性からの手紙です。それに対してある小説家が次のように答えていました。

「なぜ、人は生きるのか、命はなぜ重いのか、答えはまだ出せずにいます。・・・ひとつだけわかるのは、たぶん人は一生、この問いかけを自分にしてゆくのではないかということです。」（唯川恵、小説家）朝日２００５．７．２３

また、同じ頃、次のような文章も掲載されていました。筆者は哲学者のようです。

「夜、眠りにつく前に、死のことを考えるようになる。僕が死んでしまったら、いったいどうなるのだろう。あの世があるとは思えないから、世界はすべて消滅して、すべては無になってしまう。こうやって考えているこの僕も、消えて無になってしまう。「わあ」と叫んで暖かいベッドから起き上がる。夜中の窓を開けて、破裂しそうな心臓で、誰かに向かって助けを求めたくなる。死んでしまうのに、すべては無になってしまうのに、どうして僕はそんな生を生きないといけないんだ、と。

そう、あなたのその問いは、あなただけが抱えているのではない。想像できないかもしれないが、大人になった私もまたあなたと同じ問いを考え続けているのだ。」（盛岡正博、哲学）朝日２００５．７．２５

こうした生きること自体の不安に対し、筆者のどちらも答えを持っていません。むしろ、答えがないこと、そうした不安を抱え続けること、それが生きることだ、というのが彼らの答えであり、また、多くの無宗教の人の答えでしょう。仏教者もまたそれに近い考えではないでしょうか。ムスリムになる以前の私もそう思っていました。人々の多くは心の底からわきあがってくるそうした不安の声を聞かないように、仕事だとか、趣味だとか、娯楽に没頭します。でも、私はそのようなごまかしの人生は嫌でした。それは卑怯な生き方

だと思いました。不安から眼を逸らさずに、全身でその不安を引き受けること、それこそが自分の生に対する誠実な姿勢だと思いました。

しかし、その後、イスラームに出会い、イスラームの信仰を得て、そうした考えが間違っていたことに気づきました。なぜ生きるのか、という問いにはちゃんと答えがあったのです。慈悲深い神は、私たちをそんな不安の大海に投げ込んだまま放って置かれるような方ではなかったのです。

私たちがなにかを作るときには、まず目的があって、その目的に沿って作ります。そして、そうやって作られたものは、その目的通りの用いられ方をされたときに一番生き生きします。例えば、自動車は、一つの場所から別の場所へ迅速に移動するための乗り物として設計され、作られています。ですから、自動車は乗り物として用いられたとき、自動車の性能を最大限に発揮します。自動車を家代わりにしてその中で寝泊りすることは可能ですが、それでは自動車の性能は生かされません。人間もまた、同じです。創られた本来の目的に沿った生き方をしていない人間は不幸です。生きる不安が生じるのは、そのためです。創られた本来の生き方をしていないから、なんのために生きているのだろう、このままでいいのだろうか、と不安になってくるのです。

また、物にはなんでも取扱説明書が付いています。高度で複雑な機能を持った物ほど詳しい説明書が必要となり、製作者によって書かれた説明書がなければ、その物は十分に性能を発揮できません。人間の製作者である神は、人間に関してもその用途と扱い方を明記した説明書をちゃんと備えてくださっています。それが、神の啓示の書です。神は、地球という人間の住処を創り、さあ、そこで勝手に生きよ、と人間を放り出したりはなさいませんでした。人間がそこでどのように生きたら良いか、どうしたら幸せになれるか、を書き示した手引書を私たちにくださっているのです。それは、神から人間への「慈悲」にほかなりません。それが今日の講演のテーマ、「イスラーム、ラフマタン　リルアーラミーン（全世界への慈悲としてのイスラーム）」です。

「イスラームは全世界への慈悲である」、それがどういうことかお話しする前に、まず、この「イスラーム」、「ラフマ」、「アーラミーン」という３つのアラビア語の意味についてお話ししたいと思います。

まず、「イスラーム」ですが、これは、「安全である」という意味の「サリマ」という動詞の派生形の１つ「アスラマ」の名詞形です。「アスラマ」とは、神の意志に身を委ねる、という意味です。同じ動詞の派生形に「サッラマ」というものがありますが、それは引き渡す、委ねる、という意味です。つまり、イスラームとは、神に完全降伏し、神に身をゆだねることによって神との関係を安全なものとする、ということでしょう。一語で訳すなら、「絶対帰依」という訳語がまさにぴったりです。

その絶対帰依した人を「ムスリム」と言います。いわゆるイスラーム教徒のことです。

クルアーンの中には、『まことに、アッラーの御許における宗教はイスラームである』（３：１９）、『イスラーム以外を宗教として求める者、彼（アッラー）が彼から受け入れ

給うことはない』（３：８５）という言葉があります。

要するに、イスラーム以外に宗教はありえない、ということです。これは、イスラム教が他の諸宗教を排他的に全面否定しているということではありません。「イスラーム」とは「絶対帰依」という意味だと言いましたが、「イスラーム以外に宗教はない」とは、「絶対帰依」のほかには神との関係はありえないということです。日本人の多くのように、困った時には神様、仏様となんでも手当たり次第に懇願し、難関をくぐり抜けると必死に祈ったことなどけろっと忘れて、今日の運勢は星占いで占おう、結婚式は教会のほうがカッコいいから西洋の神さまの前で永遠の愛を誓おう、と都合のいいときにだけ神さまに擦り寄るような、そんなものは信仰ではない、ということです。何よりも神の意志に服す、それがまず人間と神の関係の基本であり、その服従の一形態として、困ったときにも他の誰でもなく、その神に助けを求める、それがイスラームなのです。

もちろん、狭い意味では「イスラーム」とは、西暦７世紀にムハンマドというアラブの預言者に下された神の啓示に基づいた宗教です。しかし、今紹介したクルアーンの節の中の『イスラーム以外を宗教として求める・・・』というときのイスラームは「絶対帰依」という広い意味でのイスラームを指すものでしょう。

「ムスリム」という言葉も同じです。狭い意味では、預言者ムハンマドの教えに従ったいわゆるイスラム教徒のことですが、クルアーンの中では、「神の意志に服した者」という広い意味でも用いられています。例えば、次のような表現がクルアーンの中にはあります。『イブラーヒームはユダヤ教徒でもキリスト教徒でもなかった。そうではなく、彼はひたむきなムスリムであった』（３：６７）

ここではイブラーヒーム、つまり、旧約聖書の中に出てくる預言者の一人アブラハムが「ムスリム」と呼ばれています。クルアーンに述べられている通り、アブラハムはユダヤ教徒ではありませんでした。なぜなら、アブラハムの息子イサクの息子、つまりアブラハムの孫にあたるヤコブが後にイスラエルと名を改め、彼の１２人の息子の一人がユダ、つまりユダヤ人という名称の始まりだからです。また、言うまでもなく、アブラハムはキリスト教徒ではありませんでした。キリスト教はユダヤ人の子孫から出たイエスによってずっと後の時代に始まった宗教だからです。ですから、アブラハムはユダヤ教徒でもキリスト教徒でもありませんでした。ただ、ひたむきに唯一の神に崇拝を捧げるムスリム、つまり、神に帰依した人でした。

仏教徒と言えば仏陀の教えに従う人のことです。キリスト教徒とは、イエス・キリストの教えに従う人のことです。仏陀のことを知らなければ仏教徒にはなれず、イエスのことを知らなければクリスチャンにはなれません。それに対して、「ムスリム」は、預言者ムハンマドの教えに従った人の名称ではありません。ムスリムとは唯一の神に服した人のことだからです。ですから、預言者ムハンマドの名前を聞いたこともなく、クルアーンを読んだこともない者でも、唯一の神を信じ、神に感謝し、神の御意志に謙虚に服そうとするなら、その人はムスリムであると言えるのです。

さて、そのムスリムの挨拶言葉が、「アッサラームアライクム」です。これは、「あなたがたのうえに平安がありますように」という祈りの言葉です。ムスリムは出会う度に、互いに相手の平安を祈り合うのです。日本の挨拶は、交わす時間に限定され、朝なら、「おはよう」、午後なら、「こんにちは」、夕方には、「こんばんは」です。また、それらは、同じ相手に対して使うのは一度きりです。一方、ムスリムの挨拶言葉は「アッサラームアライクム」１つで、朝でも昼でも夜でも、会ったときでも別れるときでも、同じ相手に一日に何度でも言うことができます。

この相手に平安を祈願する挨拶は、イスラム教徒だけのものではありません。聖書を見ると、イエスもまた、弟子たちに、「あなたがたに平安あれ」という挨拶をされているのがわかります（例えば、ルカ２４：３６）。アラビア語の聖書では、「サラームン　ラクム」という表現になっていました。英語では、「peace be unto you」です。

この「サラーム」という言葉も、「イスラーム」という言葉の元の動詞「サリマ」からの派生語です。「サラーム」とは、「平和」、「平安」という意味で、アッラーの御名前の１つでもあります。アッラーこそが平安であり、平安はアッラーからこそもたらされ、アッラーにこそ戻されるものです。平安とは、まずなによりも、アッラーとの関係において不調和がないということでしょう。ですから、たとえ戦火のただ中にあって頭上を銃弾が飛び交っていたとしても、神に身を委ねた者の心から平安が去ることはなく、「あなた方の上に平安あれ」は変わらぬ挨拶言葉であり続けるのです。

このサラームの挨拶は、実は楽園の挨拶言葉です。来世の審判の後、楽園に入れられた者たちは天使からサラームと言葉をかけられ、また、彼ら同士もサラーム、サラームと挨拶しあいます。アッラーに服したムスリムはアッラーのご満悦を得て楽園に入れられ、アッラーのお怒りと火の懲罰から守られ、究極の平和を得るのです。そこには悲しみも恐れもなく、傷つけられることもなく、心を乱すものもありません。

「あなたがたの上に平安がありますように」という挨拶言葉が示すようにイスラームは平和を祈願する宗教です。しかし、そうは言っても、現実にはイスラームの国々は争いばかりではないか、と言われるかもしれません。確かに紛争の多くはイスラーム圏で起こっています。しかし、それは宗教のせいではありません。また、キリスト教、ユダヤ教、イスラームの３つの一神教は古くから宿敵関係にあるかのように言われ、だから一神教は排他的で非寛容でいけない、と言われることがありますが、それも間違いです。それが証拠に、カリフ国家であるオスマントルコ帝国が崩壊し、帝国内の諸地方が西欧によって分割され植民地化される以前には、３つの一神教徒たちは共存していました。オスマントルコ帝国はヨーロッパの迫害から逃れてきたユダヤ教徒を受け入れ、庇護していました。キリスト教の異端も同様です。現在の紛争の原因は宗教ではなく、不正です。いわゆるイスラーム原理主義者たちは、狂信的な宗教熱にかられて自分たちの価値観と相容れない欧米に対して敵愾心を燃やしているのではなく、単に欧米諸国の自分たちに対する直接的、間接的な不正に憤っているだけです。その不正を隠蔽するために、あたかも宗教対立が原因で

あるかのような情報操作が行われているのです。

「イスラーム」という言葉の意味の説明から話がだいぶ逸れました。次に「ラフマ（慈悲)」という今日の演題のキーワードの説明に移りましょう。

「ラフマ」とは、「ラヒマ」という「慈しむ」、「憐れむ」という意味の動詞からの派生語です。この慈悲という言葉は、イスラームという宗教のキーワードの１つと言っていいものでしょう。イスラームにおいては、姿かたちのない神を具体的にイメージする助けとして、神の特性、神の働きを言い表した９９の御名が用いられます。神の働きを表す名前としては、例えば、「創造者（アル＝ハーリク)」とか、「繰り返し赦す御方（アル＝ガッファール)」とか、「糧を恵む御方（アル＝ラッザーク)」とか、「死なす御方（アル＝ムミート)」などがあります。また、特性を表す名としては、「寛大なる御方（アル＝カリーム)」、「全能なる御方（アル＝カーディル)」、「愛情あふれる御方（アル＝ワドゥード)」などがあります。そうした御名の中での最も頻繁に喚起され、最も強調されるべき特性を表したものが、「アッ＝ラフマーン」と「アッ＝ラヒーム」です。この２つの名は、いずれも「ラヒマ」という動詞から派生した形容詞です。「ラフマーン」のほうは、日本語では、「慈悲あまねき御方」と訳される、慈悲の広さを表した形容詞です。この世に存在するあらゆるものは、神のこの広い慈悲に包まれ、支えられて存在しています。神は、善人、悪人の区別なく太陽の光を降り注ぎ、雨の恵みを下し給うておられます。この広い慈悲がなければ、どんなものも今、ここに存在しえません。一方、「ラヒーム」のほうは、日本語では、「慈愛深き御方」と訳される、慈悲の深さを表した形容詞と考えられます。神はこの慈悲深さゆえに、人間の至らなさを憐れみ寛恕し、善行者には報いをくださいます。

ムスリムは、あらゆる行為を、「ビスミッラーヒッラフマーニッラヒーム（慈悲あまねく、慈悲深きアッラーの御名において)」という言葉で始めます。１つの行為の始めるにあたって神の慈悲深さに想いを馳せ、その慈悲深い神のご慈悲に助けを求めつつ、その行為に着手するのです。なぜなら、すべてはアッラーのものであり、あらゆる行為の真の行為者はアッラーであり、アッラーのご慈悲の外では私たちは存在しえないからです。私たちは、誰か人の家に行ったときには、トイレに行ったり、電話を使ったりするのに、家の主人に一言断りを入れます。「ちょっとトイレお借りします」、「電話お借りしてもいいですか」。快く使わせてくれることはわかっていても、一言声をかけるのが持ち主に対する礼儀です。何をするにつけ、「ビスミッラー・・・」で始めるのも、それと同じことです。私たちは本来は神に所有権が属すものを神の温情によって使わせてもらっているにすぎないのです。目の前のコップの中の水も、それに向かって伸ばすこの手も、そして、その手でコップの水を流し入れるこの体も、すべて神のものです。ですから、水を下さった神への感謝、自在に手を動かすことを可能にしてくださった神への感謝の意を込め、そして、神への服従に己の体を用いる意図と共に、神の御名を唱えつつ、水を飲むのです。

なお、アラビア語で、子宮、つまり、おかあさんのおなかの中の赤ちゃんの住処を「ラヒム」と言いますが、これも「慈しむ、憐れむ」という意味の動詞「ラヒマ」からの派生

語です。それについて、預言者ムハンマドＳが伝えるアッラーの御言葉として次のようなものがあります、「われはラフマーンである。われは子宮を作り、それにわれの名の一つから名づけた。それゆえ、それをつなぐ者とわれはつなぎ、それを断つ者とわれは断つ」。アッラーは、御自身の御名前、しかも最も重要な特性を表す「ラフマーン（慈悲あまねき御方）」という名前から取って、女性の子宮を名づけ、女性に栄誉を与えてくださっているのです。ちなみに、「ラヒーム（慈悲深い）」という形容は、人間にも用いることができますが、「ラフマーン（慈悲あまねき御方）」という形容はアッラーのみに付されるものです。すべてのものを覆い尽くすような慈悲は神でない被造物には持ち得ないからです。胎児にとって子宮は全世界です。そして、そこには胎児が必要とするものすべてが備えられています。つまり、子宮は慈悲に満たされた空間です。それと同じように、私たち人間が住まう地球は、私たちにとって必要なものすべてが整えられたアッラーの慈悲に包まれた空間なのです。

神が慈悲深い御方なら、どうして人々を苦しみの中に放置されるのか、どうして人を地獄に落として罰せられるのか。私たちでも苦しむ人を見たら、自分まで苦しくなってなんとか助けてあげたいと思うのに、本当に神さまがいるならば、どうして放っておくのか、救わないような神さまだったら、そんな神さまはいらない、そんなふうに言う人もあるでしょう。しかし、私たちが苦しむ人を見て気の毒に思うその慈悲の心、それもまた神が私たちに植え付け給うたものなのです。

預言者ムハンマドＳは次のように言っておられます、「アッラーには１００の慈悲があり、その１つをジンと人間と動物と昆虫の間に下し給い、それによってそれらは憐れみ合い、慈しみ合い、獣はその子を慈しむ。アッラーは９９の慈悲を、それによって審判の日に彼のしもべを慈しむために取って置かれた」。

アッラーは、１００の慈悲のうち１つを用いて被造物に慈悲の心を作り給いました。私たちが幼い子供に慈しみの心を持つのも、苦しむ人を気の毒に思うのも、みな、このアッラーの慈悲の１００分の１を振り分けられたものからできているのです。つまり、私たちが気の毒だと思う気持ちの何百倍もの慈悲の心をアッラーはお持ちなのです。私たちがかわいそうだと思うことがあれば、アッラーはそれと同じ思いを何倍もの強さで知っておられるのです。ですから、アッラーを信じるとは、アッラーの慈悲を信じることにほかなりません。

私たちの苦しみに無駄な苦しみはありません。アッラーへの揺らぎない信仰を持って苦しみに耐えた者には現世の間に、でなければ、来世において必ず十分以上の報いがあります。この世で受けたどんな苦しみも、たとえ、一刺しの棘の痛みでも、それがその人にとって罪滅ぼしになっていないものはないと預言者ムハンマドは言われています。また、この世で苦難を受け、アッラーに救いを祈ったものの叶えられなかった者は、来世で彼のアッラーへの信頼とそれゆえの忍耐に対して大きな報いを受け、その報いのすばらしさは、その者が現世においては自分の祈りがいっさい聞き届けられなければよかったと願うほど

であるとも言われます。

神が地獄の火を設けられたのは善には善をもって報い、悪には悪をもって報いるための神の公正さゆえのことですが、それはまた、神の慈悲深さゆえのことでもあります。アッラーは、人に責め苦を与えることを願って地獄を作られたのではなく、人を幸福にするために、彼らを悪行や悪徳から遠ざけるためにこそ地獄の火を一層激しく燃え立たせられているのです。お母さんが子供に、「今度同じことをやったら、おしりを叩くよ」と言うのは、子供に痛い目を合わせたくて言うのではなく、子供のためを思っての脅しです。それと同じようなことでしょう。

今引用したハディースの中に、アッラーは１００あるうちの慈悲のうち９９は審判の日のために取って置かれた、とありますが、これはわずかでも慈悲をかける余地のある者を地獄の火から引き出し、楽園に入れるためのものです。審判の日、アッラーの慈悲を必要としない者は誰もいません。たとえ、地上に生を受けた者のうちアッラーの命令に最も忠実に応えられた預言者ムハンマドＳですらです。彼はある時、次のように言われました、「あなたがたの誰ひとりとして、その人の行為がその人を楽園に入れることはありません」。それを聞いた者が、「たとえ、あなたですらですか、アッラーの御使いよ」と問い返すと、「私ですら、アッラーが彼のご慈悲で私を包んでくださらなければ」と言われたということです。

私たちがどんなに善行を積んでも、それでもアッラーに対して私たちが負う恩義に見合うだけの返礼はしつくせないこと、アッラーからのご慈悲がなければ私たちは楽園を許されるに値しないことを伝える次のような逸話があります。海の孤島の山頂で５００年にわたって崇拝行為に明け暮れ、額づいて祈りを捧げた格好で魂を召し上げられるよう祈っていた男がいました。男はそのようにして亡くなり、そして審判の日にアッラーの御前に立たされました。アッラーは天使に、「わが慈悲によってわがしもべを楽園に入れよ」と命じられます。それを聞いたその男は、「主よ、私の行いによってにしてください」と３度言います。男は自分の善行に自負があったからです。そこで、アッラーは天秤の片方に彼の５００年間の崇拝行為を、そして、もう片方に彼の視力の恵みを乗せてみせられます。すると、ちょうど天秤は釣り合いが取れ、彼の体のほかの部分の恵みが後に残りました。己の行為で楽園に入ろうと思うなら、それらの恵みに対する恩義を清算した上でなければならないというわけです。そこで、アッラーは天使に、「わがしもべを火獄に入れよ」と命じられ、男は火獄の方に引き立てられます。そこで男は、「あなたのご慈悲によって私を楽園に入れてください」と声を上げ、そこでアッラーは彼を楽園に入れられた、ということです。つまり、私たちは、悪いことを何一つしなかったとしても、それでも依然、神に対しては十分な感謝を返しきれないという点で、アッラーに負い目を負っているのです。そもそも善行をなすこの手、善行をなそうと思うこの心、それもまたみな神からもたらされたものであり、その神のお導きと許しがなければ、私たちは善行１つ自らの手ではできない存在なのです。

神に絶対帰依した者がムスリムですが、ムスリムでない者をカーフィルと呼びます。カーフィルとは、「隠す」という意味の動詞「カファラ」の派生語で、つまり、カーフィルとは、神に私たちが負う恩義を隠蔽する者なのです。悪いことを何一つしなくとも、アッラーの慈悲に全面的に依存して生きている事実を認めず、そのことを感謝しなければ、それ自体が大きな罪なのです。

先日、学生から、「ムスリムになって幸せだと思うのはどんなときか」という質問を受けました。尋ねられてちょっと困りました。なぜなら、幸福だという思いはこんこんと湧き出る泉のように絶えず私の心に満ち溢れているからです。そこでしばらく考えてから、「感謝する相手がいることを知っていること、感謝することができることが幸せだ」と答えました。いいお天気だ、アルハムドリッラー（アルハムドリッラーとは「称賛はアッラーのもの」という意味で、アッラーに感謝を捧げる賛美の表現です)、ご飯がおいしい、アルハムドリッラー、ちょうどうまい具合にバスに間に合った、アルハムドリッラー。そのような取り立てて言うほどのこともない日常の小さなことの１つ１つに感謝の言葉を口にする時、ムスリムであって本当に幸せだなあと思います。

神を信じないということがどれほど恩を欠いたことであり、どれほど罪深いことであるかは、その対極におられた預言者ムハンマドの次に紹介する逸話がとてもよく物語っているかと思います。

預言者ムハンマドの死後、人々が彼の妻アーイシャの許を訪れ、彼女に尋ねました、「あなたがアッラーの御使いについて見た最も驚くべきことについてわれらに告げてください」。すると彼女は泣き、「彼のことでどんなものが驚くべきことでなかったでしょう」と言って、あるエピソードを語り始めました。「ある晩、彼は私の許にやって来て、私と共に寝床に入られました・・・」。話を要約すると、寝床に入った預言者ムハンマドは妻アーイシャに、「礼拝をしたいのだが、行かせてもらえるだろうか」と許可を求められました。そこで彼女は、「私はあなたに側にいて欲しいけれども、あなたの礼拝したいというその望みを私は私の望みに優先させます」と言って彼が床を離れて礼拝に立つことを許します。余談ですが、この言葉のやり取りの中には、預言者ムハンマドの伴侶に対する敬意と思いやりが良く現われているように思います。さて、そうして彼はアーイシャが見ている前で礼拝を始められるのですが、彼は礼拝しながら涙をとめどなく流し始められます。そして、とうとう朝の礼拝の時間が来るまで夜通し泣きながら礼拝を続けられました。そこでアーイシャは彼に尋ねました、「どうしてそんなに泣くのですか。あなたは預言者であり、あなたの罪はすべて赦されたとアッラーは仰せられたではないですか」。すると、彼の答えはこうでした。「どうして私が感謝するしもべでないことがありえようか。どうしてそのようにせずにはいられようか。アッラーは私に次のような節を啓示し給うているというのに」。そう言って彼はクルアーンのある一節を読誦されました。つまり、彼は溢れる感謝の思いに堪えきれず、一晩中泣き明かされたのです。それほど彼を感謝させた恵みとは一体なんだったのでしょうか。彼をそれほどまでに泣かせたクルアーンの一節は次のようなものでし

た。せっかくなので、まずアラビア語でお聞かせし、それからその意味をご説明しましょう。『まことに、諸天と地の創造、夜昼の交替、人に役立つものと共に海を行く船、アッラーが空から降らせ、それによって死んだ大地を生き返らせ、その中であらゆる動物を拡げさせ給う雨、風向きの変更、空と地の間を駆使させられる雲のうちには思考する者への印がある』（２：１６４）ここに述べられていることは私たちが普段ほとんど恵みとも意識していない自然界のごくありふれた現象です。「ああ、朝が来た」、「夜が来た」、「ああ、雨が降る」「ああ、風が吹く」、私たちはそう思うだけです。重い船が水の上を走るのを見ても、大量の水を含んだ雲が空に浮かぶのを見ても不思議とは思わず、そうした仕組みを整え給うた神の力に驚嘆することもありません。そうした恩恵に対し、かつて私たちが一滴でも感謝の涙を流したことがあったでしょうか。不信仰であることの罪とはそういうことです。

今、引用したクルアーンの一節では、自然界の様々な現象が列挙され、それらのうちには、「思考する者への印がある」と述べられていました。「印」という日本語に対応するアラビア語は「アーヤ」です。「アーヤ」には「奇跡」という意味もあります。私たちが見慣れて不思議とも思わない自然界の諸現象は、実はどれも驚くべき奇跡であり、その奇跡の御業の主であるアッラーの存在を指し示す印なのです。

さて、最後に「イスラーム　ラフマタン　リルアーラミーン」の「アーラミーン」ですが、これは、「アーラム」という単語の複数形です。「アーラム」とは、世界という意味です。人間の世界、動物の世界、植物の世界、などという言い方で用いられます。「アーラム」は「知る」という意味の「アリマ」という動詞の派生語で、あるものを知るための手段となるもののことです。つまり、世界が「アーラム」と呼ばれるのは、それが世界の創造者である神を知る手段、神の存在を指し示す印だからなのです。私たちの五感は物質を知覚するために備えられていて、物質でない神を捉えることはできません。しかし、私たちの周囲にあるすべてが神の存在を指し示す印であり、私たち自身もまたその印の一つなのです。

なお、アラビア語の名詞の複数形は大別して２つあり、理性を持った生き物、つまり、人間などの場合、「ウーン」という語尾を付けることによって複数形となります。例えば、「ムスリム」の複数形は、「ムスリムーン」です。アラビア語は格変化というものがあるので、前置詞を伴う名詞の場合には、ちょっと形が変わって、「ムスリミーン」となります。「アーラミーン」はこれと同じ形です。世界を意味する「アーラム」にはもう１つ「アワーリム」という複数形があります。ここで「アワーリム」という方の複数形でなく、「アーラミーン」という理性を持った生き物の複数形が採られているのは、人間、そして、人間と同じような理性を持ったジンという霊的存在を指していると考えられます。イスラームという宗教は、特定の時代、特定の地域、特定の人々の宗教ではなく、今この世に生を受けたすべての人々、そしてこれから生まれてくるすべての人々に向けられた神からの慈悲のメッセージです。

「アーラミーン」という複数形は理性を持った者を指すと言いましたが、イスラームが慈

悲であるのは人間、そして霊的な存在のジン　―クルアーンの中にはジンが預言者ムハンマドのクルアーン読誦を聞いて、その知らせを他のジンたちに伝える、という話が出てきます―　に限りません。動物や植物にとってもまた、イスラームはアッラーからそれらへの慈悲です。なぜなら、アッラーは預言者ムハンマドを通じて、動物や植物の扱いについて指示を与え給うているからです。例えば、イスラームでは、動物をほふる際はアッラーの名を唱え、頚動脈を切るという最も苦しみの軽い屠殺方法を取りますが、そればかりか、屠殺が速やかにいくようナイフはよく研ぎ、動物に恐怖を与えないよう殺す直前までナイフを動物に見せないようにという指示を預言者ムハンマドは出しておられます。猫を閉じ込めて餓死させた女が地獄に落とされるという話もあります。また、戦時においてはナツメヤシのような実のなる木を切ったり焼いたりすることは原則的には禁じられています。イスラームは生きとし生きるすべてのもの、存在するすべてのものにとって慈悲であると言っていいでしょう。実際、アッラーはクルアーンの中で、イスラームのメッセージの伝達者である預言者ムハンマドについて次のように仰せられています、『われらがおまえを遣わしたのは諸世界への慈悲にほかならない』（２１：１０７）。

今日のこの集まりは日本に住むインドネシア人ムスリムの方々によって企画されたものですが、「イスラームは全世界に慈悲を与える」というテーマには、心優しき日本人の皆さんにイスラームがすべての人々への神からの慈悲のメッセージであるということをなんとしても伝えたいという彼らの切なる思いが込められていると私は思います。そして、それは、かつては皆さんと同じようにムスリムでなかった私、もっと正確にいうなら、自分がムスリムであることに気づいていなかった私から皆さんに強く訴えたいメッセージでもあります。このメッセージはもちろん、世界中のあらゆる人々に伝えたいメッセージですが、特に日本人の皆さんにと思うのは、―これは日本を訪れた外国人ムスリムの多くが語っていることですが―　日本人はその行動様式、性格においてまるでムスリムのようだからです。日本人が持っている清潔さ、勤勉さ、謙虚さ、穏やかさ、時間厳守、質素などの美徳はムスリムが持つべき美徳でありながら、しばしばムスリムに欠けている美徳です。それで、日本を訪れたボーン・ムスリムは日本人を見て、ムスリムというのはまさにこのような人たちであり、この人たちに欠けているのはただ、「ラーイラーハイッラッラー（アッラーのほかに神はない)」という真理の知識だけだと感じるのです。

この「ラーイラーハイッラッラー」とはどういうことか。また、この楽園の鍵とも言うべき言葉を私たちにもたらした預言者ムハンマドをどうして私たちは預言者と認めることができるかについて午後にお話したいと思います。

諸世界への慈悲としてのイスラーム（イスラーム、ラフマタン　リルアーラミーン）（２）

今日のセミナーのテーマ、「全世界への慈悲としてのイスラーム」に込められたメッセージは、「イスラームは、『あの人たち』の宗教ではなく、あなた自身の宗教でもあるのですよ」ということです。

イスラーム教徒になるのは、非常に簡単です。そのためには特別な知識も、特別な人の立会いも、特別な儀式もいりません。誰でもいいですから２人のムスリムを前に、「アシュハド　アッラーイラーハ　イッラッラー（私はアッラーのほかに神はないと証言します)、ワアシュハド　アンナムハンマダン　ラスールッラー（そして、私は、ムハンマドがアッラーの使徒であると証言します)」と言うだけでおしまいです。なぜそんなに簡単かというと、人はもともとムスリムだからです。それをイスラームでは「フィトラ」と呼びます。クルアーンの中でアッラーは次のように仰せられました、『それゆえ、おまえの顔をひたむきに宗教に直立せしめよ。アッラーが人々に造り給うた彼の性向を（厳守せよ)。アッラーの創造に変更はない。それこそ正しい宗教である。だが、人々の大半は知らない』（３０：３０)。この節の中の言われる『アッラーが人々に造り給うた彼の性向』が、「フィトラ」、つまり、真の宗教を認知する素地のことです。預言者ムハンマドも次のように言っておられます、「およそ子供はすべてフィトラを持って生まれて来ない者はない。しかし、両親がユダヤ教徒にしたり、キリスト教徒にしたり、マニ教徒にするのである・・・」。つまり、私たちは、誤った教育を受けることによって無神論者になったり、多神教徒になったり、その他の宗教を信じたりしますが、もともとはイスラームの素地を持って生まれているということです。それで、私は、先の話の中で、「ムスリムでなかった」という表現を、「ムスリムであることに気づいていなかった」と言い直したのです。私たちはみなムスリムなのにただそのことに気づいていないのです。それは非ムスリムとして３０年生き、それからイスラームに出会った私の実感でもあります。イスラームを学び始めてわずか１ヵ月半後には信仰告白をした私ですが、イスラームを学ぶ中で私が感じたのは、今まで知らなかったまったく新しい価値観を知らされているというよりは、前から知っていたけれどすっかり忘れていたものを呼び覚まされているといったものでした。「イスラームとの出会いは、未知との遭遇ではなく、懐かしい帰郷のようなものであった」と私は私の入信記の中で書いています。

イスラームについて語る場合、１日５回の礼拝だとかラマダーンの断食だとかジハードだとかいった「行」の方に焦点が当てられることが多いですが、今日は、「信」の方、つまり、ムスリムの心の中に焦点を当ててお話ししようと思います。

ここにおいでの皆さんの大半は仏教徒かと思いますが、何を信じていらっしゃるのでしょうか。仏陀の教えとは何でしょうか。死んだらどうなるとお考えでしょうか。死んだら、成仏して、この「私」は消滅するのでしょうか。転生して別の生き物になるのでしょうか。極楽浄土に移り住むのでしょうか。お盆の時には死者の霊を迎えると言いますが、その霊

はどこからやって来るのでしょうか。成仏したか転生したか極楽浄土に移り住んだのであれば、お墓はなんのためにあるのでしょう。位牌に向かってお経を上げることになんの意味があるのでしょうか。さまざまな宗派、たくさんの仏典、異なる教義・典礼、それらのうちから何を拠り所に何を信じたらいいのでしょうか。かつて私は、自分の生き方を模索する中で仏教書も多少読みかじってみましたが、読めば読むほど、何が仏陀の教えなのか、結局死んだらどうなるのかますますわからなくなっていった覚えがあります。そもそも、仏陀は死後のことについては触れられなかったというのが本当のところのようです。

読めば読むほどわからなくなる、というのは、キリスト教の場合も同じでした。最初の人間の過ちによって人類すべてが罪を背負うことになり、その罪から人間を解き放つために罪のない神のひとり子であるイエス・キリストは人間として磔刑になられたと信じるのがキリスト教徒ですが、その論理がよく理解できませんでした。死後どうなるかについても、抽象的ではっきりしません。また、教会の典礼は後世の人間が作り上げていったもので、イエスの信仰生活、あるいはイエスの直弟子たちの信仰生活に基づいたものではなく、当のクリスチャン自身過去の自己批判を行っている事実をどう捉えたらいいのか。どこまでが神のご意志でどこからが人間の創作なのか、何が本当のイエスの教えなのか、それがよくわからないのです。

それに対して、イスラームの信仰は単純明快です。また、信仰の根拠となる啓典には内容においても成立過程においてもあいまいなところがありません。おまえたちにはおまえたちを創った神がおられる。その神に感謝し、善をなせ。やがてこの地上には終末が訪れ、すべての人間は蘇り、神の審判を受ける。信仰し、善をなした者は報われ、楽園で永遠の生を享受するが、信仰を拒み、悪をなした者は罰として地獄の火に焼かれる。すべてを見通す神がおまえの行いを見ておられるのである、それゆえ、心して生きよ。それだけです。

神から遣わされた使徒のひとりであるイエスが説かれたのもこのことです。マタイの福音書１３：４７～５０に次のようにあります。「天の国は次のようにたとえられる。人々は網を湖に投げ下ろして、いろいろな魚を寄せ集める。網が一杯になると岸に引き上げ、座って、良いものは器に入れ、悪いものは投げ捨てる。世の終わりにもそうなるのだ。天使たちがやって来て、正しい人々の中にいる悪い者どもをより分け、燃え盛る炉の中に投げ込むのである。悪い者どもは、そこで泣き喚いて歯軋りするだろう」。

イエス以前の使徒たちもまた同じメッセージと共に神からもろもろの民の許に遣わされました。それが「啓示の書」、つまり、「啓典」です。啓典の中には、今言った基本メッセージが述べられているだけでなく、人間が幸福に生きるための具体的な指示もあり、それは啓示された時代、宛てられた民族に見合った内容になっています。預言者ムハンマドもそうした使徒のひとりで、彼の許に啓示された啓典クルアーンはそうした啓典のひとつですが、ほかの使徒、ほかの啓典と大きく違う点が１つありました。それは、預言者ムハンマドが最後の使徒であり、彼がもたらした啓典クルアーンは、最後の啓示であり、したがって、それ以前の使徒たち、それ以前の啓典と異なって特定の時代の特定の民族に宛てら

れたものではなく、それ以降のあらゆる時代のあらゆる人々に宛てられたものだということです。

なぜ預言者ムハンマドが最後の預言者であるかと言いますと、彼の後にはもはや預言者は必要ないからです。なぜ、彼の後にはもはや預言者が必要ないかというと、彼が携えて来た啓典クルアーンは時代、民族を超えた完全で普遍的なメッセージだからです。また、彼が神から遣わされた正真正銘の使徒であり、彼の呼びかけが正真正銘神からのメッセージであることを裏付ける時を超えた証拠を彼が伴っているからです。ある者がいきなり、私は神からの使者であるから私の言うことを聞け、と言い出しても、その証拠がなければ信じることは困難でしょう。ですから、いずれの預言者も、彼の預言者性を裏付ける証拠を神から与えられていました。例えば、モーセは彼を信じようとしないエジプトの人々の前にいくつかの奇跡を起こして見せました。その１つが大海を２つに割ってイスラエルの民、つまりユダヤ教徒たちをファラオの追っ手から救い出すことでした。イエスが病人を癒したり、死人を蘇らせたのも彼が神の使徒であることを人々に知らせるためでした。しかし、そうした奇跡は、その場に立ち会った者、あるいは、その場に立ち会った者から話を直接聞いた者、そして、その出来事があってから時間的な隔たりが大きくない時代の者にとっては信憑性があり、説得力を持つものであっても、時間が経てば経つほど、信じることは困難になっていきます。そこで、新たな奇跡を携えた新たな預言者が必要となってくるわけですが、最後の預言者ムハンマドに与えられた奇跡は時の経過によって風化するものではありませんでした。彼に与えられた奇跡がなんだったかというと、それがクルアーンです。

クルアーンが奇跡であることは、それをアラビア語で読んでみないとわからないことです。読む、と言ってもこの場合は、「音読」を意味します。

私は、フランス留学中にあるきっかけからイスラームについて知ろうと思い立ち、まずフランス語のクルアーンを買って読もうとしました。しかし、あまりの退屈さに数ページ以上はどうしても読み続けられませんでした。誰だったか、世界的な著名人も、世界で最も良く読まれている本の中でこれほど退屈な本はない、というようなことを言っていたように思います。イスラームについて自力で知ることを諦めた私は、パリのモスクを訪れ、そこで紹介された女性とイスラームの勉強を始め、それから１ヵ月半後にはシャハーダというイスラームの信仰告白をしていましたが、その時点でもクルアーンにはほとんど目を通していませんでした。ただ、わずか数行の短い章をアラビア語で学び始めるや、たちまちその音の美しさに魅せられていました。ムスリムとなった私はフランス文学の研究をやめ、半年後にはアラビア語を勉強するためにエジプトに留学していましたが、それはどうしてもクルアーンをアラビア語で読みたいと思ったからでした。

イスラームについて知ろうと思い立ち、フランス語のクルアーンを買った、という言い方をしましたが、その言い方は不正確なものです。なぜなら、フランス語のクルアーンというものはありえないからです。なぜなら、クルアーンは啓示されたアラビア語以外には

ありえず、どんな言語にも翻訳できないからです。翻訳ができないというのは翻訳が禁じられるという意味ではありません。翻訳不可能なのです。日本では日本ムスリム協会が日本語アラビア語対訳クルアーンを出していますが、表紙に書かれたアラビア語のタイトルは、「クルアーン意訳」です。私がフランス語訳のクルアーンが退屈で読めなかったのは、クルアーンの音の美しさが翻訳によって完全に落ちてしまっていたからです。クルアーンの多くの章は脚韻を踏んでいますが、韻を損なわずに外国語に翻訳することは不可能です。また、アラビア語の単語にはしばしば複層の意味がありますが、翻訳するにはその複層の意味のうちの１つに対応する訳語を選ばざるを得ず、そうすることによってそれ以外の意味は切り捨てられることになります。さらに、クルアーンには特別な読誦のルールがあって、たとえ同じ単語、同じ言い回しであっても普通のアラビア語の本や新聞を読むのとは異なる読み方をします。その特別な読み方は、預言者ムハンマドがアッラーの命令を受けた天使ジブリール（ガブリエル）から口述で教えられたものです。例えば、普通のアラビア語の長母音は２拍の長さですが、クルアーンの中では次に来る文字によっては４拍や６拍になることがあります。預言者ムハンマドの弟子のひとりが、４拍伸ばすべきところを２拍で読んだところ、それを聞いた別の弟子がそれは私が教わったところのクルアーンとは違う、と言って咎めたという話が伝えられています。２拍伸ばそうが４拍伸ばそうが意味上はまったく変わりありませんが、天使ジブリールが読んだ通りの読み方をしなければ、もはやそれはクルアーンではない、ということなのです。言い遅れましたが、「クルアーン」とは、読むという意味の「カラア」という動詞の派生語で、読まれるべきもの、というような意味です。預言者ムハンマドは文盲でしたから、彼は天使ジブリールから教えられたクルアーンをそっくり頭の中に書き留められました。彼の弟子の多くもまたクルアーンを始めから終わりまで暗誦していました。以来、今日までクルアーンを暗誦することがムスリムにとっての第一課題となっています。クルアーンがクルアーンであるゆえんは、音の美しさ、言葉の意味の深遠さだけではありません。クルアーンには聞く者の心をぐいと掴む不思議な力があります。同じ意味のことを日本語や英語で聞いても心が揺さぶられないのに、アラビア語で言われるとその言葉の重さ、荘厳さに威圧され、心が震えずにはいないのです。

私はアラビア語のクルアーンを聞いてたちまちその美しさに魅されましたが、それは７世紀当時のアラブ人たちにも起こったことでした。当時のアラブ人は詩の民として知られていました。試作に秀でていたアラブ人にはクルアーンが人の手によっては到底書き得ないものであることを認めざるを得なかったのです。クルアーンの中でアッラーは、クルアーンが神から下された奇跡であることを認めたくないならば、それに匹敵するものを人々を総動員してでもよいから作ってみせよ、とアラブ人を挑発して仰せられています。実際、多くの者がクルアーンに聞き惚れ、イスラームに入信しました。それを恐れた多神教徒たちは、クルアーンが読誦されるとそれを耳に入れまいと音を立てて妨害しようとしました。耳栓をして心を奪われまいとした者もいました。

２代目のカリフとなるウマルは、最初イスラーム弾圧の先鋒に立っていました。クルアーンによって人々を惑わし、先祖代々からの神々を辱めるムハンマドに苛立ったウマルはある日とうとう彼を殺そうと決意し、剣を取って家を出ます。途中、ただならぬ形相のウマルに出会った男が彼を呼びとめ、どこに行くのか尋ねました。「ムハンマドを殺しに行くのだ」というウマルの返答を聞いた男は、実はイスラームを受け入れていたので、ウマルの殺意をなんとか別方向に転じさせようと思い、「それはともかく、おまえは自分の妹夫婦がイスラームに入信していることを知っているのか」と言いました。自分の身内が自分の知らないところでムハンマドの宗教を受け入れていたと知らされたウマルは腹を立て、そのことを問いただすために妹夫婦の家に向かいました。戸口まで来ると、家の中からクルアーンの読誦が聞こえてきました。いきり立ったウマルは、ドアを破らんばかりにして家の中に入って妹夫婦に詰め寄ります。夫に飛びかかろうとするウマルを止めようとした妹をウマルは払いのけ、殴られた妹は頭から血を流して倒れました。その血を見て、ふっと我に返ったウマルは、妹にわび、気持ちを静め、彼らが読んでいたものを見せるように言います。妹は、クルアーンは不浄の状態で触れることは許されないと言って拒みます。そこで、ウマルは水で身を清め、それから妹からクルアーンを受け取るとそれを読み始めました。それは第２０章［ターハー］だと言われています。それを読んだウマルは、その美しさに心を貫かれ、それが正真正銘唯一の創造主アッラーの御言葉であることを悟ります。ウマルは、すぐさま預言者ムハンマドの許に向かい、彼を殺しに来たのではないかと固唾を呑んで見守る人々の中で、信仰告白をしました。頑なにイスラームを拒絶していたウマルの心は、妹を傷つけたことをすまなく思った時に、堅いガードが緩み、その隙を突いてクルアーンの言葉は彼の心に届いたのでした。

クルアーンはアッラーから預言者ムハンマドに下された啓示であると同時に、彼の預言者性を保証するための奇跡でもあります。そして、その奇跡は、それまでの預言者に与えられた奇跡と異なり、奇跡としての有効性を時を越えて保ち続けます。なぜなら、クルアーンという奇跡は、預言者ムハンマドの死後も、１４００年という年月を経た今も、さらにこの先もずっと、読誦の継承者によって彼が天使ジブリールから読み聞かされた通りの読み方で読まれる度にリアルタイムで繰り返されるからです。クルアーンを舌に乗せ、音を発する時、ムスリムは神の語りかけを聞くという奇跡をその場で実体験するのです。

さて、その奇跡の書クルアーンは人間が幸福になるためのマニュアル書で、その中には人間が創られた用途、つまり、生きる目的も書かれています。クルアーン第５１章５６節に次のようにあります、『われが人間とジンを創ったのは、われに仕えさせるためにほかならない』。人間が創られた目的は、全世界の主であるアッラーにしもべとして仕えることだったのです。先ほど、人間にはムスリムとしての性向、つまり唯一の神アッラーへの帰依という「フィトラ」、本性が組み込まれているということをお話しましたが、私たちには、神にしもべとして仕える、という本性があらかじめインプットされています。それで私たちは仕えるべき神を求めずにはいられないのです。神といっても、それは必ずしも宗教的

な神とは限りません。宗教的な神の存在を否定する者も、別の神を持っています。「神」という言葉が不満であれば、「生きる拠り所とするもの」と言い換えてもいいでしょう。人はだれも生きる拠り所を持ち、それを支えに生き、そのために命を削り、時には命を投げ出すのです。子供のために生き、会社のために命を削り、愛のためにすべてを捨て、芸術に精魂を込める。それは皆、それらを神としているのです。宗教を排除した共産主義の国では、共産主義の信念を神とし、指導者を神としました。人は神なしでは生きられないように作られており、真の神を知らない者は、その代用物を神として立てざるを得ないのです。しかし、それらの代用物は真の神の代わりにはなりえません。なぜなら、真の神以外は有限であり、変化にさらされているからです。子供が突然死ぬこともあるでしょう、会社が突然倒産することもあります。愛にも終わりが来ます。有限なものを拠り所とする限り、不安から解放されることはありません。「ラーイラーハイッラッラー（アッラーのほかに神はない)」が意味するところはまさにこのことです。私たちのすべてを知り尽くした私たちの創造主、永遠不滅のアッラーのほかには拠り所となるものはない、ということです。

日本人の皆さんは、「アッラー」という名を聞いただけで、もうそれは自分とは関わりのない他所の神さまのこと、と感じられるかもしれません。そこでちょっとこの「アッラー」という名称についてお話しておきましょう。アッラーというとイスラームの神だと皆さんは思われるでしょうが、実はそうではありません。アラブ圏にはイスラム教徒ばかりでなく、キリスト教徒もいます。ヨーロッパにキリスト教が伝わる以前の古くからのキリスト教徒です。彼らの読む聖書はもちろんアラビア語です。そしてそのアラビア語の聖書の中の「神」という単語には「アッラー」が用いられています。アラブ人のキリスト教徒にとっても神はアッラーなのです。今日最大のムスリム人口を抱える多民族多宗教国家インドネシアのイスラーム化は１３世紀頃に始まりますが、キリスト教が伝えられたのは、オランダによって植民地化された１８世紀になってからのことです。日本にキリスト教が伝えられた時にも神のことを日本語でなんと呼ぶかが問題となり、そのままデウスさま、と呼んだり、天主と呼んだりしました。日本人が「カミ」と呼ぶところのものは、人であれ、動物であれ、物であれ、常識を超えた力を持ったもののことで、キリスト教でいうところの「神」とはまったく異なるものだったからです。もともと多神教の国だったインドネシアでも唯一神を指すための言葉がありませんでした。そこで、先に浸透していたイスラームの語彙をそのまま使って、「アッラー」という言葉を用いることにしたようです。ですから、インドネシアのキリスト教徒にとっても、神は「アッラー」なんだそうです。

ムスリムの信仰告白のキーセンテンスの１つ「ラーイラーハイッラッラー」の「イラーハ」、ここでは文脈上対格になっているので、主格では「イラーフ」ですが、それは定冠詞なしの「神」という意味です。磔にされたイエスは、「わが神、わが神、どうしてあなたは私を見捨て給うたのか」という詩篇の言葉を口にされたと福音書（マタイ２７：４６）に記されていますが、彼はこの言葉をアラム語で言われています。「エリ、エリ、レマ　サバクタニ」です。アラム語で神を意味するのが（これはヘブライ語でも同じですが)、「エル」

です。「イスラエル」、「ガブリエル」の「エル」です。それに「私の」という一人称単数代名詞の接尾語が付いたものが「エリ」で、これをアラビア語に言い換えると、「イラーヒー」となります。一説によると、「アッラー」とは、この「イラーフ」に定冠詞の「アル」が付いた「アル＝イラーフ」が縮んだものだと言われます。つまり、アッラーとは、定冠詞付きの大文字の「the God」という意味だというわけです。

今言ったように、日本人は並外れて高い山、並外れて古い大木など、常識の枠を超えたものを「カミ」と呼んできました。スバ抜けた能力を持ったサッカー選手をサッカーのカミさまなど呼ぶのもその例でしょう。そうした山に宿る霊、木に宿る霊などをイスラームは全面否定するものではありません。「ジン」と呼ばれる高度な知能を持った霊的存在がそういうところに住んでいたりすると考えられるからです。また、預言者ムハンマドＳが伝える話の中には、木が泣いたり、石が言葉を発したりする話も出てきます。それどころか、クルアーンにも、森羅万象がそれぞれの言葉によって神を称えていることが告げられています。イスラームが否定するのは、そうした霊や特殊能力を持ったものを拠り所にしたり、恐れたり、崇めたりすることです。何度も言うように、拠り所としうるのはアッラー以外にはないからです。

アッラーを信じるとは、アッラーに愛されていると知ることです。私たちは、この世に生を受けた後、どんなに長く生きても１００年あまりで死んで土に返ります。私は生きている間は親兄弟、伴侶、友人たちによってかけがえのない存在として愛され、死後もまた、かけがえのない存在として記憶され続けますが、その彼らも１００年後にはみないなくなっています。そして、彼らの死と共に私に関する記憶も消えます。私が存在したことの痕跡も消えてなくなり、ほかの誰でもないこの私を知っているものは誰もいなくなります。私は同じように生きて死んでいったその他大勢の一人として不在の闇に沈みます。それはまるで私が始めから存在しなかったかのようでしょう。生きていることがたまらなく不安になるのは、私という個人にとっては、つまり主観的にはこんなにもかけがえのない、他の誰とも置き換えがたい自分の生が、地球規模の人類史的な視点から見たときには、つまり客観的には無数のアリの行列のうちの一匹のアリほどの特異性もないことに気づいた時でしょう。私はいったい何者なのか。こんなちっぽけな自分の存在意義はなにか。また、私の肉体が滅びた後、私のこの意識はどうなってしまうのか。

もう一度お伺いしますが、皆さんは何を信じておいででしょうか。皆さんは本当に仏教徒でしょうか。仏陀の教えとは何でしょうか。死んだらどうなるとお考えでしょうか。死んだら、成仏して、この「私」は消滅するのでしょうか。転生して別の生き物になるのでしょうか。極楽浄土に移り住むのでしょうか。お盆の時には死者の霊を迎えると言いますが、その霊はどこからやって来るのでしょうか。成仏したか転生したか極楽浄土に移り住んだのであれば、お墓はなんのためにあるのでしょう。位牌に向かってお経を上げることになんの意味があるのでしょうか。

ご自分が何を信じているのか、ご自分が信じているものが果たして本当に仏教か、今一

度よく考えてみてください。日本では、人が亡くなると、墓に埋葬され、遺族は墓参りをし、一周忌、三回忌、１３回忌などを執り行います。それが仏教式の死者に対する儀礼だと考えています。しかし、最近出された「ブータン仏教から見た日本仏教」（今枝由郎、ＮＨＫｂｏｏｋｓ、日本放送出版協会）という本によると、そのようなことをするのは日本だけだそうです。日本以外のアジアの仏教徒は墓を作らず、法要するとしても転生するまでの期間である４９日までのことで、それ以降には追善供養はなされないそうです。なぜなら、輪廻転生の考えからしてそれは意味のないことだからです。４９日を過ぎれば、その人は肉体的に消滅したばかりか、魂としてもすでに別の生に移り変わっていて、生前の「何某何男」という個人はもうどこにもいないからです。あくまで個として故人にこだわることは、仏教の教えに反するもので、したがって、日本人の死生観は、実は自分たちが信じているほどには仏教的ではないのです。

イスラームにおいては、人は死んだ後もずっとその人であり続けます。私が「私」と呼ぶこの個人は、人類史の始めから終わりまでを通して、たった一人しかいません。その私のかけがえなさの支柱となっているのがアッラーです。私が生きている間は私のかけがえのなさは私自身が支えています。生きるというのは私自身のかけがえのなさを追求し、築いていく作業のようなものです。私が良い学校に入りたいと試験勉強に励んだり、特技を身につけたいと学んだり、業績を残そうと一生懸命働いたり、人から愛されたいと思って人に気を使うのは、みな、自分は特別な存在なのだ、ということを感じたいからにほかなりません。しかし、そんな努力も虚しく、私自身が死に、私を知っている人たちが死に去れば、私という存在の特異性は消えてなくなります。しかし、私のことを決して忘れない方がたったひとりだけおられます。それがアッラーです。アッラーは私のなすことを逐一見ておられます。アッラーは私が誰にも知られずになした行為の証言者であり、誰にも明かさず心に秘めた私の思いも見通した御方です。私とアッラーとの関係は、私が生まれた時に始まり、私が死んで終わるものではありません。私がイスラームに出会い、アッラーのことを思うようになるずっと以前から、アッラーは私のことを思い、私をアッラーとの出会いへと導いてくださいましたが、そればかりか、私がこの地上に生を受ける遥か昔から私の誕生を計画し、準備してくださっていました。私の意識が働き始める遥か以前からアッラーは私のことを念じ、私が死の眠りに沈んだ後もずっと私のことを覚えておいてくださるのです。このアッラーという揺らぎない支柱を得、永遠不滅のアッラーのしもべという永遠不滅のアイデンティティーを得れば、後はどんなものも失うことを恐れることはなく、しかも、必要なものは向こうからこちらにやって来るでしょう。

この世には多くの苦しみ、多くの悲しみがあります。多くの不正、多くの悪がなされています。善人は必ずしも報われません。悪人が栄え、善人が不当に苦しめられるのが現実です。この世がこの世限りであったら、こんなに理不尽なことはありません。しかし、慈悲深いアッラーは人間の生をそのような理不尽で無意味なものとはされませんでした。善は必ずこの世で報われるか、そうでなければ、あの世で報われます。悪もそうです。なし

ただけのことは必ず返ってきます。

クルアーンの中に時間章（第１０３章）と呼ばれるとても短い章があります。そこでアッラーは次のように仰せられました、『時にかけて。まことに人間は損失の中にある。ただし、信仰し、善行をなし、真理を勧めあい、忍耐を勧めあう者は別である』。私たちは生れ落ちると同時に死に向かって歩み始めます。時は、掬い上げた砂のように両手の間からさらさらさらさらと滑り落ちています。どんなに財産を蓄えても、どんなに肩書きを身につけても、どんな業績をなしても、いずれはそれらを置いて身ひとつで土に戻っていかなければなりません。誰一人例外はありません。すべての人が損失の中にあるのです。しかし、その損失から逃れる手立てがあることをアッラーはこの章で示してくださっています。善悪の報いをなす神を信じ、善行に励み、そしてさらに人にも信仰と善行を勧め、その際に出会う苦難に耐えるための忍耐を勧めあうことです。それをなした時、人は損失をまぬがれ、真の意味で人生の成功者となるのです。

イスラームというとすぐに様々な戒律のことが思い浮かび、非常に厳しい自力主義の宗教で、そういうものを課すアッラーという神は非常に厳しい神であると思われるかもしれませんが、実際にはたいへん易しい宗教であり、慈悲の神アッラーは救済のボーダーラインを非常に低く設定してくださっています。

預言者ムハンマドにはハムザというおじさんがいました。ハムザは迫害を受ける甥を全力で庇護していましたが、ある戦闘で多神教徒の手にかかって命を落とします。その後、その愛するおじを殺した男から預言者ムハンマドの許に手紙が届きます。「自分はイスラーム入信を考えているが、クルアーンには『また、（慈悲深い御方のしもべとは）アッラーと並べて他の神に祈らず、アッラーが禁じ給うた命を正当な理由なしに殺さず、姦通を犯さない者である。それをなした者は罪を見出す。彼には復活の日、懲罰が倍増され、そこに屈辱を受けて永遠に留まる』（25：６８、６９）とあり、自分はそこに述べられたすべての罪を犯した。そんな自分でも罰を免れる可能性はあるか」、そう彼は問い合わせてきたのです。そこで、預言者ムハンマドは、『ただし、悔いて戻り、信仰し、善行をなした者は別で、それらの者はアッラーが彼らの悪行を善行に換え給う。アッラーはよく赦す慈悲深い御方であらせられた』（25：70）というクルアーンの節を書き送ります。すると、男は次のように書いてきました、「この節には善行が条件となっているが、自分には善行を行えるかどうか自信がない。もっとやさしい御言葉はないのか」。そこで、ムハンマドは、『まことにアッラーは彼に共同者が並べ立てられることは赦し給わないが、それ以外のことは御望みの者には赦し給う・・・』（4：48）という節を書き送ります。すると男は、「自分はアッラーの御望みの赦される者に入るかどうかわからない。もっと寛大な節はないのか」と重ねて尋ねてきました。そこで預言者は、『言え、己自身に仇して度を越したわがしもべたちに、「アッラーの御慈悲に絶望してはならない。まことに、アッラーは罪をそっくり赦し給う。まことに、彼こそはよく赦す慈悲深い御方」』（３９：５３）の節を書き送りました。すると、これを聞いた男は、「これこそ私の求めていたものだ」と言ってその場で入信したというこ

とです。救済は行為によってもたらされるのではなく、ひとえにアッラーのご慈悲に寄り頼むことによるものであることをこの逸話ははっきりと示しています。

救済は最終的には行為によるのではなく、アッラーのご慈悲によるものであることを示す逸話をもう１つ紹介しましょう。これはイスラーム以前の昔の話です。

あるところに９９人の人を殺した男がいました。彼は、ある賢者に、どうしたらその罪から救われるかについて尋ねました。すると、彼は修道士に会うように指示します。そこで、彼はその修道士のところに行き、「９９人の人を殺したが、懺悔すれば赦されるだろうか」と尋ねました。すると修道士は、「いいえ。懺悔しても赦されないでしょう」と答えます。そこで怒った男はこの修道士を殺し、彼が殺した人の数は１００人となってしまいました。その後、男はまたこの賢者に頼み、ひとりの学者を紹介してもらいます。男はその学者のところに行って尋ねました、「１００人の人を殺したが、懺悔は受け入れられるであろうか」。すると、学者は言いました、「懺悔は受け入れられます。あなたと懺悔の間を妨げるものはなにもありません。ただし、しかじかの土地に行きなさい。そこにはアッラーを信仰する人たちがいるから、そこで彼らと共にアッラーを信仰しなさい。あなたの土地に戻ってはならない。そこはあなたにとって良くないところである」。そこで、男はその土地に向かって出発したのですが、道半ばにして病に倒れます。それでも彼は道を進み続け、最後ははいずりながら息絶えます。そこに慈悲担当の天使と懲罰担当の天使がやって来ると彼の処遇について言い争いになりました。慈悲担当の天使は言いました、「彼はアッラーに対し赦しを乞う懺悔者としてやってきたのである」。一方、懲罰担当の天使は言いました、「彼は善行を何一つ行っていない」。すると、そこに別の天使がやって来て、「彼がどちらの土地により近かったかによって決めよ」と言います。そこで天使たちが距離を測ると、彼がはいずって進んだ手の長さの分だけ目指していた国に近かったことがわかり、慈悲担当の天使が彼を受け入れることになりました。

この男の許には山ほどの悪行だけがあり、まだ信仰者の国には至っておらず、善行は何一つしていませんでした。しかし、信仰者に近づこうとしたその彼の心を汲んで、アッラーは男のすべての罪を赦し給うたのです。

私はこの逸話を読むと、胸が締め付けられます。あるはずの真理、いるはずの神を求めてもがいていたかつての自分を思い出すからです。死の恐怖から逃れたかったのではありません、現実の苦しみから救われたかったのでもありません。死後のことはどうでもよく、すべては平穏無事でなんの悩みもありませんでした。ただただ真理を知りたかったのです。このまま真理を知らずに、つまり、神がいるのかいないかの答えを得ずして死ぬようなことがあったら死んでも死に切れないという切迫した思いがありました。しかし、アルハムドリッラー、アッラーはそんな私の思いに応えて、イスラームの道に導いてくださいました。

私たちのような改宗ムスリムにとっては、愛する親、兄弟、親しい友人がムスリムでないということが晴れ渡った空にただ一点重く暗い影を落とす雲です。

幸い、私の両親は、５年ほど前、トルコ旅行中に訪れたある先生のお宅で、その先生の誘いに応じて信仰告白の言葉を口にしました。それより何年か前に私が涙ながらに懇願しても口にすることを拒んだ父が自分から信仰告白すると言い出したのには喜ぶよりも驚くよりも、まずその真意を疑い、いい加減なことを言わないでよ、と引き止めたほどでした。しかし、それでも父は、言う、と言って、先生の後からたどたどしくアラビア語で信仰告白の言葉を繰り返しました。ですので、とりあえずは、楽園行きの切符は手にしたと言っていいかと思います。その後、母の方は私が誘えば一緒に礼拝をすることもありましたが、父の方は相変わらずお宮さんの修復工事がなんだ、お寺の檀家衆との旅行だと付き合いとしての宗教行事に関わっています。それは付き合いとしてやむを得ないとしても、父の心が一向に「イスラーム」、つまり、唯一の神への絶対帰依に向かわないことが私にはもどかしくてなりません。父は神を信じる、と言います。でも、ご先祖様を拝むことも大切だし、氏神様を祭ることも大切ではないか、それもこれもみなひっくるめて大切にしたらいいじゃないか、と言います。そして、崇拝をアッラーだけに向ける私の信仰を、真の信仰者となる一歩手前のまだ未完の状態であるかのように見ます。これが典型的な日本人の宗教観かと思います。そんな父に私は言います、「先祖を拝むことは、荷物を届けてくれた宅急便のお兄さんに感謝して頭を下げ、その荷物の送り主には礼状一つ書かないのと同じだよ。飛行機に乗った時に落ちないように祈るのは、守備範囲が限られている氏神さまではなく、全世界の主である神のほうでしょう。どうせ祈るならいつでもどこでも万能な神さま一本にしたらいいでしょう」。でも、私の言葉は父の心には届きません。父が頭の中で思い描く神と私が知っている神とはまったく別物で、話がかみ合わないのを感じます。今日のこの講演も父が聴衆のひとりだったら、なにをどう話したらいいだろうかと考えながら話を準備しました。私が父に、また、皆さんに伝えたいのは、アッラーが私たちすべての神であるということ、つまり、アッラーは誰にとっても「私の神」であるということです。「神」とは、日本人がしばしば「内なる声」などと呼ぶ漠然とした存在ではなく、また、遥かかなたの高みから人間界を見守るだけの遠い存在でもなく、現実にこの私を見つめ、この私に語りかけ、この私を力強く導く御方、そしてなによりもこの私のためにすべてを備えてくださった御方であり、神を信じるとは、そうした神の愛と働きを全身で感じ、その喜びのうちに生きることなのです。（了）